

トランスセオレティカルモデルの 体重管理の変容ステージに関する研究

022

—セルフエフィカシーを用いた無関心期におけるサブタイプの検討—

○新保^{しんぼ}みさ*1, 赤松利恵*1, 武見ゆかり*2

*1 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

*2 女子栄養大学食生態学研究室

【背景・目的】トランスセオレティカルモデルを適用した体重管理の変容ステージにおいて、無関心期にサブタイプの存在が指摘されている。そこで、本研究では、セルフエフィカシー（以下SEとする）を用いて、体重管理の変容ステージが適切に分類できているかを検討し、適切ではない場合、変容ステージのサブタイプの特徴を調べることを目的とした。

【方法】2008年7月、A社の健康保険組合員994名を対象に、体重管理の誘惑場面における対策の変容ステージ、SE、体重管理の知識、現体重に対する認識、生活習慣、属性について質問紙調査を行った。基礎統計量を算出した後、SEについて、性別と変容ステージの二元配置分散分析を行った。その後、男女別に、変容ステージとSEの一元配置分散分析及び、Tukeyによる多重比較を行った。次に、無関心期をSEの中央値で2つに分け、他の変容ステージ間でそれぞれの項目についてKruskal-Wallis検定、 χ^2 検定をし、SEの高い無関心期を基準にBonferroniの補正による多重比較を行った。

【結果】回答者は793名で（有効回答率：79.7%）、男性551名（69.5%）、女性218名（27.5%）、欠損24名（3.0%）であった。

性別、変容ステージとSEについて検討した結果、性別と変容ステージの主効果が認められ（性別： $F=19.318$, $p<0.001$, 変容ステージ： $F=7.950$, $p<0.001$ ）、交互作用は認められなかった（ $F=0.405$, $p=0.805$ ）。次に、多重比較を

行った結果、男性の無関心期のSEが関心期よりも高かった（ $p=0.001$ ）。

そこで、男女別に、無関心期（男性216名、女性68名）をSEの中央値で2つに分け、SEの高い無関心期の特徴を調べた。その結果、SEの高い無関心期の男性（110名）は、全ての変容ステージよりもBMIが低く（SEの低い無関心期、関心期、準備期、実行期：各 $p<0.001$, 維持期： $p=0.004$ ）、関心期よりも間食をしない者の割合は高い一方で（ $p=0.006$ ）、維持期よりも朝食を毎日食べる者、運動習慣がある者の割合は低く（朝食： $p=0.005$, 運動： $p=0.004$ ）、準備期よりも喫煙している者の割合は高かった（ $p=0.004$ ）。また、SEの高い無関心期の女性（34名）は、BMIが準備期よりも低いものの（ $p=0.001$ ）、生活習慣は特徴的な傾向がみられなかった。

【結果・考察】体重管理の変容ステージは準備性によって正しく分類できていない可能性が示唆された。SEの高い無関心期の男性は、BMIは低いものの、生活習慣は健康的ではなく、介入の必要があると考える。

どなたでもご自由に参加ください。

（連絡先）

新保みさ (misa.shimpo@hotmail.co.jp)
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科 赤松利恵気付
TEL&FAX : 03-5978-5680